

講演

## 福音主義神学の流れと今後の課題

橋本 昭夫

戦後五〇年の節目の年、さまざまに関連で歴史的意識の高揚が見られます。それは歴史的信仰に生きる教会、そしてその信仰を吟味する神学においてとみに顕著となるのも自然の勢いであります。私たち福音主義神学陣営におきましても、新しい世紀を目前に控え、自らの歩みを検証したいという願いは当然であり、また有意義かつ必要なことであると思います。これからしばらく、かかげました主題にそつて福音主義の歩みを振り返り、またその展望につままして私なりの観点を申し述べさせていただきますが、大方の批判をいただければ、喜びこれにまさるものはありません。なお私のこの講演の背景となっておりするのは、先にもたれました日本福音主義神学会第七回全国研究会議レジュメ「戦後昭和」史と日本の教会」所収の本講演の主題と同名の小論です。合わせて参照くだされば幸いです。さつそく話しを進めてまいります。まず「福音主義」とは何かを確認しておきます。この用語も多様な意味をもつことは言うまでもありません。たとえばドイツ語関連におきましては、エヴァンゲリッシュという言葉は、カトリッシュに対する言葉であります。またおよそみずからの神学において「福音」を対象とするのだという自覚のもとになされる神学は、いろいろ

な意味を含みつつも、やはり福音主義神学と自らを規定するでしょう。しかし私たちの関連においてはいわゆる「保守的福音主義」(コンサヴァティヴ・エヴァンジェリカル)の意味で用い、手短かには「聖書の十全靈感を信じ、歴史的・正統主義信仰に立つ神学的立場」であると確認しておきたいと思えます。またこのような福音主義の立場に対し、聖書観ならびにキリスト教理解に関し、上述の正統主義を離れ、聖書の内容批判を妥当とし、したがって歴史的信条の意味の規範性を相対化する立場があります。いわゆる「自由主義」と一般に呼びならわされている立場です。私は上述のレジュメにおいては無批判に「自由主義」ないし「自由主義神学」という用語を使用しましたが、この用語は多分に私たちの立場からの偏見を含むように思えますので、別の用語を使うのがフェアであろうと考えました。しかし別の用語となりますと、適当なものを見つけないのは容易ではありません。「非福音主義」というのは聞き慣れない用語です。あるいはNCC系とも考えましたが、それも十分に記述的とは思えません。エキュメニカル派というのも考えましたがやはり歴史的系譜をたどるとなると不適當です。そこで余り用語規定に時間を費やすのもなんですので、やはり便宜的に「自由主義」の用語を続いて使いたいと思えます。ただし、出来るだけ立場的判断を希薄にした記述的用語として用いたいと思えますので、そうにご理解くだされば幸いです。

「福音主義神学の流れ」という表題を掲げておりますが、それはどのような歴史的事象を指示しているのでありましょうか。果たしてそのように呼ぶことのできる歴史的事象があるのかが問われねばなりません。浅学を顧みずあえて申し上げますならば、今まで顕著な福音主義神学というものは見られないということですが、しかしそれは必ずしもマイナスを意味するのではなく、福音主義的神学の性質に由来すると言っているのでしょうか。つまり福音主義神学は、基本的には教会の歴史的歩みにおいて認識され、信条として形成された教理体系を普遍的救済真理として受容し、告白する立場ですので、新しい名をもつ神学としては前面に出てこないという性格を基本的にもつようになります。福音主義神学は、

自由主義神学に対するアンチテーゼとして多分に「護教的」性格を持っています。その性格は、護るべき神学的立場を前提としています。したがって福音主義的・神学系譜なるものを書くこととするならば、一般に言われる神学史とは違った範疇の設定が必要であろうかと思えます。一般に言われる神学史というのは、通例「神の言葉の神学」とか、「実存論的・神学」とか、「解放の神学」とか、あるいは名を付して「リッチェル神学」とか、「バルト神学」とか、「北森神学」とかを軸にして書かれますが、そういう意味では福音主義神学史というのは書き得ないであろうということです。

私は、福音主義的立場は、日本のプロテスタントの源流にあると考えさせられています。その端的な根拠を一つだけ申し上げますと、明治初期の植村正久らを中心とする教会形成において「公会主義」なる主張がなされましたが、それは「万国福音同盟」の基本信条をそのまま踏襲しています。そしてこの「万国福音同盟」というのは、今の世界福音連盟(WEF)の先祖にあたるものです。明治初期の信仰の流れが福音主義的であったということは宣教史的にも当然と言えましょう。と言いますのは一九世紀の欧米諸教会の宣教活動は正統主義的なりバイブル運動を濃厚に背景としていたからです。日本における福音主義は、短い歴史ながらもさまざまになされて来た神学形成の底流として存在していると思えます。その底流を掘り起こすならば、日本における福音主義の、違った意味での神学史を描くことができるであろうと思えます。しかし当面、私は福音主義神学の流れを、私たち日本福音主義神学会の会誌である『福音主義神学』にあらわれた神学論文の傾向にしたがって考えてみたいと思えます。それには二つの大きな理由があります。ひとつは、この会誌が日本における福音主義的・神学形成を明確に意図して形成された私たちの神学会の神学的営為を結晶させていること、もう一つは日本におけるもう一つの神学的潮流として認知されつつあるということとです。『福音主義神学』を出発点とすることにより、より具体的にその流れを把握できるのではという計算があります。

さきほど私は、日本福音主義神学会が「日本における福音主義的・神学形成を明確に意図して形成された」と申しまし

た。それは「福音主義神学」の創刊号に表明されている言葉を基礎としています。そこにおいて「聖書の十全靈感説を信ずる信仰の立場が、神学を拒否するのではなく旺盛で活潑な神学的活動を促し、また真に根源的な神学的根拠を与える」と認識されています。また反省的警鐘として「福音主義の信仰を、この世の現実と関らせて、現代における生きた関連性のもとに把握することを怠ってきた」ということが述べられています。この二つの発言は、福音主義神学形成を意識的に進めていかねばならないということを経た反省の上にたつてなされているように思えます。そしてその反省というのは、「自由主義」陣営における旺盛な神学的営為に触発されてなされていると見ても大きく間違っていないと思います。

実際、日本プロテスタンティズムにおいて、積極的な神学的努力がなされてきました。内容的判断はともかく植村・海老名の「キリスト論々争」に始まり、今日に至るまで欧米の神学潮流に刺激を受けつつ営まれていきます。その流れを戦後のそれにしほっても（わたしたちはとくにそれに限定して「自由主義」神学の流れをみたいと思いますが）、多くを数えることができます。野呂芳男氏が一九八五年にもにされた戦後神学の回顧においては「七つの渦」という表現でまとめておられますが、それを一瞥することは、福音主義神学の座標を見定めるためには有益であろうかと思えます。第一は「北森神学」あるいは「神の痛みの神学」でした。日本の文化伝統とキリスト教がどのようにつながるのかというテーマに、伝統的心情の基本的カテゴリーとされる「痛み」の深い次元をキーに神の愛の本質を解明しようとしたものでした。大乘仏教的な要素を踏襲しているように思われ、その意味ではいわゆる「土着化」の試みとして成功を収めたと判断されます。第二は、赤岩牧師の「共産党入党宣言」を巡るものでした。それは教会の社会的・政治的責任を問うものであり、一代以上も必要としましたが福音主義陣営においてもアクチュアルな問題となった神学的主題を扱っています。第三は、「キリスト論々義」でした。それは伝統的キリスト論的教義に対して問題を投げかけたもので、小

田切医師と北森氏との間でかわされたものです。「まことの神・まことの人」という公理的教理が題目にとどまらず、新鮮な教義学的展開を促すことを教えた論争であったと言えます。第四は、ブルトマンの「非神話化」論に端を発するものでした。それは信仰の歴史性を無視できないということを示した渦であったと思われる。第五は滝沢克己・八木誠一両氏の間にかわされた神学論争ですが、その意見の差を越えて言うならば、両者の土俵は日本的形而上学と福音の関係をどう考えるかというものであったと言えるでしょう。第五の渦は、鈴木正久日基教団議長の名で、一九六七年復活祭に公にされたいわゆる「戦責告白」に端を発し、教団の万博参加問題、さらに「東神大問題」と発展した一連の渦の中で浮上してきた神学的問題です。これはある意味では、赤岩牧師がその時代に問題としたこととつながるものであろうかと思えます。しかしそこで問題となったのは教会論ではなかったでしょうか。あるいは具体的にこの世界における教会の使命の同一性を求めての苦悩であったと思われる。そして第七は、モルトマン神学などに触発された神学の歴史的使命について答えを見い出そうとするものでした。個人的信仰から、歴史に参与する信仰へというふうにつづめて言うことができるでしょうか。

以上おおよっぱに「自由主義」陣営の神学的営為の流れを見ましたが、そこに一貫しているのは、神学のこの世界の現実への関りというテーマではないかと思えます。それは日本の現実であれ、さらに世界が狭くなって地球的規模のものであれ、であります。一九七〇年に日本福音主義神学会設立にあたり、私が先に引用しました一つの言葉は、「自由主義」陣営の神学的営為を背景としているのではないのでしょうか。「神学の世界の現実との関り」を福音主義神学の出発点からどのように形成していくことができるのか、そのような関心が背景にあったように思います。それでは、そのような問題意識からなされた福音主義の神学形成はどのような道をたどって来たのでしょうか。福音主義神学は、まず聖書論を固めようとした。そのことは「福音主義神学」の第一五号までの論文ならびに講演のうち、九割弱までが

聖書論関係で占められていることを見てわかります。それは自からの立脚点を何にも先立って明確にしようとする意図があったのだと理解できます。そのあと優勢になってきたのは、文化、とくに日本文化と福音を巡る論究でした。実

際この主題に二回の全国研究会議があげられています。日本の文化状況を無視しては、宣教の実績はあがらず、福音主義神学の責任を充分果たせないのではないかと問題意識があったと思われる。それに関連してですが、教会と国家の問題も、一貫した関心であったと言えるでしょう。第二次世界大戦下における教会のあり方が、日基教団のみにとどまらず、日本のプロテスタント教会すべての問題であり、それへの対応を避けることができないという認識が神学陣営の違いを越えての一般的認識になったと判断することができるでしょうか。このように見ていきますと福音主義神学の流れが、いわゆる神学の垂直次元への集中から、その水平次元への認識へと導かれてきたと言えないでしょうか。そして私にはそれは福音の必然性に由来すると思えるのです。福音は垂直次元を第一としながら、つまり神との関係ということですが、その神が創造主でもあるという認識から、水平次元の事柄、つまりこの世界の現実を統合的に捉えます。福音に忠実であるとすれば、当然そのような認識へと導かれるのではないのでしょうか。

日本における福音主義神学は、たしかに神学の形成において長く活発ではなかった。しかし福音主義の出発点、つまり聖書の十全靈感説に立ち歴史的信条に立つ神学は、それが十分な神学的努力において展開されるならば、必ずやレレヴァントな神学形成につながるという新たな確信が、新しい福音主義神学の営みの原動力となったのだと私は認識しています。そして私自身この確信を、さまざまな歴史的象徴を通して、強められる思いしております。と言いますのは、おどろばない言い方ですが、「自由主義」神学陣営においても、水平次元へのバランスを欠いた傾倒は、結局は不毛ではないかという認識が、世界的にWCCレベルでも、あるいは日本のレベルにおいても生まれつつあるのではないかということ。もし私が見るように、私たちが福音主義陣営において世界への関心が強まり、また「自由主義」陣営にお

いて伝統的信条に表現されている、人間の神との関係における根源的問題、その人間をその関係において救う三一なる神への信仰が再認識されつつあるという観察が正しいとするならば、私は福音主義神学の今後をこれからお話しするように展開できるのではないかと思っています。

不十分ながらすで述べたことを踏まえて、私は福音主義の課題を二つの点にしばって考えることができると思います。一つは福音主義神学が、その宗教改革的信仰の源泉に立脚しつつ、その信仰のもつ現実的インパクトを終末論的完成の希望のもとに、いま・ここでの現実はどうアクチュアライズしていくかという課題です。それは日本という宗教、文化、社会、政治的現実をトータルに捉えつつ、福音信仰のもつ意味を明らかにしていき、また具体的活動へと展開していくことだと言えるでしょう。罪の赦しの福音、信仰によってのみ義とされるという救済論、そしてそれを契機として示される人間観、歴史観、世界観がどのようなものであり、それが現実の日本に、そして広く世界にどのようなレヴァンスを持っているのかを展開していく課題であるとも言えます。言葉を換えて言えば、聖書のメッセージが示す諸価値が現実のただ中で、個人的実存の形成のみならず、社会ひいては世界の歴史の形成に強力な原理であることを示していくということになるでしょうか。

そして二つ目ですが、「自由主義神学」に対する福音主義の側からの神学的証しです。福音主義に立つ者として私たちは自らの基盤を常に検証しつつ歩まねばなりません。同時にその営為においてすべての真摯かつ実質的な神学的営為に対し開かれた対話の姿勢が必要ではないでしょうか。福音主義神学の真理性を確信するかぎり、私たちはそれを証言する責任をもっているわけであり、またその確信は恐れを取り除いてくれるはず。実際、「福音主義神学」の書評欄を見えますと、「自由主義」陣営の神学的著作に対する評価が健全なバランスを保ちながらなされているのを確認することができます。そのことは、言わず語らずにすべての真摯な神学的営為をまず理解しようとする私たちの姿

勢の反映ではないでしょうか。また逆に、まだそんなに顕著ではありませんが、「自由主義」陣営から福音主義に対する期待があるようにも思えます。私はそれは決して私たちの立場からの思い込みとは言えない客観性があるように見えます。もしそうであるなら、私たちの方から、十分な学的水準と的確な内実をもった神学を提示することができるなら、証しの責任を果たすことが出来るのではと思わされています。また、もし私たちが福音主義神学の妥当性と有効性を十分に学的に根拠づけつつ提示することができるならば、それは日本福音主義神学会創立当初に「福音主義神学にとって発言と立証の一大チャンス」という使命認識の成就につながっていくのではないのでしょうか。

日本プロテスタントイズムの神学的源流は、福音主義に流れを汲むものであることをこの講演の冒頭で確認しましたが、今それから一世紀半近くの時が流れ、新しい世紀を迎えようとするにあたり、その成熟への歩みを始めたとするのは、ナイーブに過ぎるでしょうか。私は、今世紀においてさまざまな神学的探求がなされ、客観的には試行錯誤的な混乱があつたように見えますが、「自由主義」神学の流れも、この世紀末において歴史を通じて信じられてきたいわゆる正統主義的信仰の真理性に目覚めつつあるように思えてなりません。その意味において福音主義神学は、さらに懸念的な神学的営為が求められているように思えます。贖いの主、歴史の主の導きをいただきつつ、そのお方の再びおいでになるその時まで、変わらぬ福音の闡明化のために微力を尽くしていきたいと願わされています。

(神戸ルーテル神学校校長)